

財団大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第16集

泉佐野市日根野所在

日 根 野 遺 跡

—主要地方道大阪和泉南線建設に伴う発掘調査報告書—

1996年9月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

泉佐野市日根野所在

日 根 野 遺 跡

—主要地方道大阪和泉泉南線建設に伴う発掘調査報告書—

1996年9月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター



調査区遠景



銭貨出土状況



銭貨出土地点の土層状況

序 文

大阪府南部の泉佐野市は、大阪市と和歌山市のほぼ中間のいわゆる泉州地域南部に位置しています。泉州沖に計画された関西国際空港建設に伴い、アクセス道路や鉄道（関西空港自動車道、JR・南海関西空港線）の建設、関連施設建設および海岸部の埋め立て事業（りんくうタウン）などの開発が急激に進みました。泉佐野市を中心とした地域における文化財調査もそれに伴って、件数が増加しています。

関西国際空港は平成6年に開港し、それに伴うアクセス道路や鉄道は完成しましたが、関連事業は引き続き計画されています。その中の一つとして交通量の増加に対応するために、4車線の主要地方道大阪和泉泉南線新設事業が計画されました。道路建設に先立ち、試掘調査を行った結果、遺跡の存在が確認されたため、発掘調査を実施することになりました。

今回の調査地は、日根野遺跡の北西端部にあたります。日根野遺跡を含む泉佐野市日根野地域は、五摂家の一つ、九条家が領有した荘園として著名な地域です。「九条家文書」や鎌倉時代の村絵図などにより、村の景観や生活が復元可能で、中世史研究者からは注目されていました。近年、空港連絡道がこの地域を縦断することから、発掘調査や総合調査が行われ、多くの成果があげられています。

空港関連道の調査では、屋敷地が複数検出されており、荘園の集落部分については徐々に解明されつつあります。今回は、道路拡張部分の狭い範囲の調査のみに限られていたため、耕作地や水利に関する新たな知見はありませんでしたが、中世の耕作痕や近世の廃棄土坑などが検出されました。また、耕作地に点在して確認された銭貨は、当時の信仰を物語るものとして注目されます。

調査にあたり、ご協力いただきました地元自治会、関係機関各位に深く感謝いたします。今後とも、当調査研究センターの事業に一層のご理解、ご援助を賜りますようお願いいたします。

平成8年9月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター
理事長 坪井清足

例 言

- 1、本書は、大阪府泉佐野市日根野に計画された、主要地方道大阪和泉泉南線道路建設に伴う、日根野遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、本調査地は、泉佐野市日根野地内に所在する。
- 3、本調査は、大阪府土木部岸和田土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、(財)大阪府文化財調査研究センターが実施した。(財)大阪府文化財調査研究センターでは、調査部長井藤 徹、参事兼調整課長中西靖人、調整係長福田英人、南部調査事務所長藤田憲司および同所調査第1係長西口陽一の指示のもと、同所調査第1係技師中村淳磯、橋本亜希子が発掘調査を担当した。また、遺物の写真撮影は南部調査事務所整理係主任技師立花正治が行った。さらに、同所整理係長石神幸子ほか、同係員および同所調査第1係員の協力を得た。
- 4、調査は、平成8年4月1日から同年9月25日まで実施した。整理作業は、現地調査と併行して現地事務所で行い、さらに現地調査終了後は、引き続き南部調査事務所で行った。平成8年9月30日の報告書の作成を以て、すべての作業を完了した。
- 5、本書で用いた北は座標北であり、標高はT.P.を基準とする。
- 6、調査の実施にあたっては、下記の方々の援助を賜った。記して感謝の意を表したい。(敬称略)
〈調査指導〉石神 怡・橋本高明(大阪府教育委員会)、森村健一(堺市立埋蔵文化財センター)
〈調査参加〉和田しづか、角野尚代、角野孝子、石松 直、長屋あゆみ
- 7、本書の作成は中村と橋本が担当し、執筆は中村が行った。
- 8、本書の編集は中村が行い、橋本がこれを助けた。

凡 例

- 1、本書中のレベルはすべてT.P.(東京湾平均海面)を用いている。本書中における座標値は、国土座標系に基づいており、すべてm単位とする。
- 2、本書中の方位は、国土座標第VI座標系の座標北を示している。調査地点で座標北は、磁北より東へ $6^{\circ}30'$ 、真北より西へ $0^{\circ}22'$ 振れる。
- 3、土色の記述は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖7版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修(1987)に準拠した。
- 4、土器の断面は、須恵器は黒塗り、その他は白抜きで表示する。
- 5、実測図の縮尺は、各トレンチ平面図は1/300、断面図は縦1/40、横1/160、遺構図は1/40、遺物の実測図は1/4を原則とするが、必要に応じて縮尺を変えたものもある。
- 6、遺構番号はトレンチ毎ではなく全体を通じて、検出順に通し番号を付けたため、時期の前後するものや地区の離れるものもある。
- 7、写真の縮尺は任意である。

目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
第1章 位置と環境	1
第1節 位置と周辺の遺跡	1
第2節 文献による歴史的記録	3
第2章 調査にいたる経緯と経過	6
第3章 調査の方法	7
第4章 調査成果	8
第1節 基本層序	8
第2節 遺構	11
1. 3区	11
2. 4・5区	13
3. 6区	17
4. 7区	20
第3節 遺物	21
第5章 まとめ	24
参考文献	28

挿 図 目 次

図1 周辺の遺跡	2
図2 和泉国日根野村絵図 正和五(1316)年 (宮内庁所蔵のものをトレース)	4
図3 日根野地区小字図	5
図4 調査区周辺小字図	5
図5 調査区位置図	6
図6 トレンチ位置図	7
図7 調査区東壁断面図	9
図8 調査区横断面図	10
図9 3区第1面、第2面遺構平面図	11
図10 3区第3面遺構平面図	12
図11 4区第1面遺構平面図	13
図12 建物1平面・断面図	14
図13 土坑2平面・断面図	14
図14 4・5区第2-1面、第2-2面遺構平面図	15
図15 4・5区第3面遺構平面図	16

図16	銭貨出土状況模式図	17
図17	6区第1面遺構平面図	17
図18	6区第2面遺構平面図	18
図19	ピット22平面・断面図	19
図20	6・7区第3面遺構平面図	19
図21	段状の高まり 断面図	20
図22	出土遺物(石器)	21
図23	出土遺物(包含層出土)	22
図24	出土遺物(銭貨)	23
図25	出土遺物(瓦・陶磁器)	23
図26	出土遺物個体数グラフ	25
図27	遺構変遷図(中世)	26
図28	遺構変遷図(近世)	27

図 版 目 次

図版1 調査区周辺、3区遺構

- | | | | |
|---|---------|---|-----------|
| 1 | 調査区周辺 | 2 | 3区第1面、第2面 |
| 3 | 3区第3面 | 4 | 3区土層断面 |
| 5 | 3区土坑4断面 | | |

図版2 4・5区遺構

- | | | | |
|---|-----------|---|-----------|
| 1 | 4区第1面 | 2 | 4区建物1 |
| 3 | 4区土坑2断面 | 4 | 4区土坑2完掘状況 |
| 5 | 4・5区第2-1面 | 6 | 4区第2-2面 |

図版3 4・5区、6区遺構

- | | | | |
|---|---------------|---|----------|
| 1 | 4・5区第3面 | 2 | 4・5区溝22 |
| 3 | 4・5区溝22土器出土状況 | 4 | 6区北半部第1面 |
| 5 | 6区南半部第1面 | 6 | 6区銭貨出土状況 |
| 7 | 銭貨出土地点の土層状況 | | |

図版4 6区、7区遺構

- | | | | |
|---|--------------|---|------------|
| 1 | 6区北半部第2面 | 2 | 6区南半部第2面 |
| 3 | 6区南半部第3面 | 4 | 6区第3面 |
| 5 | 6区ピット22石検出状況 | 6 | 6区段状の高まり断面 |
| 7 | 7区 | | |

図版5 出土遺物(1)

図版6 出土遺物(2)

第1章 位置と環境

第1節 位置と周辺の遺跡

地理的環境 日根野遺跡の所在する泉佐野市は、大阪府の南部に位置する。北西は大阪湾に面し、南東には和泉層群より形成される和泉山脈がある。中央部には中位から高位段丘、西部と南部には低位段丘及び沖積低地からなる和泉平野がひろがる。市域の南部を流れる樫井川の右岸に段丘が広くひろがっており、日根野遺跡はこの中位段丘上に位置する。

歴史的環境 泉佐野市域では多くの遺跡が知られていたが、特に近年、関西国際空港に伴う開発が進んだことから発掘調査件数が増加し、遺跡の状況が徐々に明らかになっている。中でも、空港にアクセスする道路や鉄道の新設に伴い、泉佐野市を縦断するかたちで大規模な発掘調査が行われ、日根野地区の状況が判明してきた。日根野遺跡は、文献史料で著名な日根荘とは切り離せないため、文献による歴史的记录に関しては次項で述べることにし、ここでは周辺の遺跡の状況を紹介する。

旧石器時代では、遺構は検出されていないが、日根野遺跡のほか、三軒屋遺跡、郷之芝遺跡などでナイフ形石器が出土している。長滝遺跡では、ナイフ形石器のほか、楔形石器や彫器などが出土している。ただ、散発的な遺物の出土が確認されているのみであるため、全容は不明である。

縄文時代では、樫井川下流域の船岡山遺跡で後期の集落が、中流域の三軒屋遺跡で晩期の集落が検出されている。また、海岸に近い湊遺跡などからも晩期の土器や石器が出土しており、段丘部のみではなく、平野部にも遺跡の分布がひろがっている。

弥生時代では、遺跡の分布はひろがるが、沖積低地の発達が少ないという地理的条件に制約されているため、進展はあまりみられない。日根野遺跡においても遺構や遺物が検出されているが、実態は不明である。縄文時代から継続している、樫井川流域の船岡山遺跡や三軒屋遺跡は、前期の代表的集落である。樫井西遺跡や諸日遺跡では、方形周溝墓が検出されている。

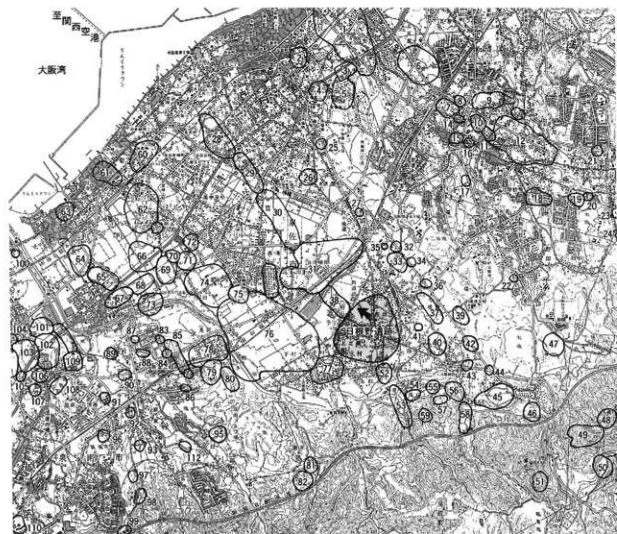
古墳時代では、三軒屋遺跡や諸日遺跡などで集落跡が検出されているほか、5世紀後半の方墳が相次いで発見されており、長滝古墳群として知られている。1号墳から人物車輪、3号墳から石見型盾形車輪が出土している。三軒屋遺跡では、韓式系土器や初期須恵器が出土しており、注目される。さらに三軒屋遺跡の上之郷地区では、7世紀中頃の終末期古墳として方墳の石ノ子古墳が検出されている。やや離れるが、海岸部の湊遺跡や松原遺跡では、製塩土器が出土しており、製塩遺跡として知られている。

古代では、白鳳時代建立として知られる禪興寺跡がある。寺域ははっきりしないが、推定域の調査で、山田寺式、川原寺式、紀寺式などの軒丸瓦が出土している。飛鳥時代では、三軒屋遺跡や湊遺跡などで集落が検出されている。また、長滝遺跡では覆い屋付きの井戸が検出され、畜串や独楽などが出土したため、なんらかの祭祀が行われたことが考えられている。奈良時代では、湊遺跡から多くの掘立柱建物跡が検出されており、漁具の蛸壺や土錘のほか、「和同開珎」なども出土している。また、長滝遺跡では、瓦窯跡が検出されているが、供給先は明らかになっていない。平安時代では、日根野遺跡のほか、湊遺跡、上之郷遺跡、三軒屋遺跡、船岡山遺跡などで住居跡などが検出されている。上之郷遺跡では、緑釉陶器やふいごの羽口などが出土しており、有力農民の屋敷地と考えられている。

中世では、ほぼ市内全域に遺跡の分布がひろがるのが確認されている。日根野遺跡のほか、湊遺跡

や上町遺跡、榎井西遺跡、机場遺跡などで大規模な集落跡が検出されている。また、文献で知られている壇波羅宮跡は、発掘調査により土坑墓群などが検出されている。

なお、当調査区の北に位置するJR阪和線日根野駅前地区において、(財)大阪府埋蔵文化財協会が平成3～7年度に発掘調査を行っている。この地区は昭和61年度から、泉佐野市教育委員会が調査を続けており、岡口遺跡・小塚遺跡・白水池遺跡・白水池北遺跡・中嶋遺跡として報告されている。主に中世～近世の耕作地が検出されており、土師器・瓦器・陶磁器・銅銭などが出土している。



- | | | | | |
|------------|------------|-------------|----------------|-------------|
| 1. 舟遺跡 | 24. 鳥取野遺跡 | 47. 地ノ谷遺跡 | 76. 岡ノ崎遺跡 | 93. 上野中遺跡 |
| 2. 上野安遺跡 | 25. 市福河遺跡 | 48. 岡山遺跡 | 77. 中島遺跡 | 94. 神洲寺跡 |
| 3. 壇波羅宮跡 | 26. 船場遺跡 | 49. 二本木跡 | 78. 高ノ下遺跡 | 95. 甲ノ川遺跡 |
| 4. 土町前遺跡 | 27. 北沢遺跡 | 50. 大木遺跡 | 79. 櫻井城跡 | 96. 狐地遺跡 |
| 5. 牟婁遺跡 | 28. 松原遺跡 | 51. 稲倉池北方遺跡 | 80. 湯田遺跡 | 97. 手紙遺跡 |
| 6. 山出遺跡 | 29. 安佐遺跡 | 52. 机場遺跡 | 81. ダイショウ遺跡 | 98. 石ヶ原遺跡 |
| 7. 大久保A遺跡 | 30. 長成池遺跡 | 53. 船新遺跡 | 82. 二軒池遺跡 | 99. 牟婁遺跡 |
| 8. 大久保B遺跡 | 31. 植田池遺跡 | 54. 有山遺跡 | 83. 上之郷遺跡 | 100. 河原遺跡 |
| 9. 大谷池遺跡 | 32. 関口遺跡 | 55. 河原遺跡 | 84. 鬼田遺跡 | 101. 新庄寺遺跡 |
| 10. 御藏遺跡 | 33. 中島遺跡 | 56. 河原東遺跡 | 85. 丸出南遺跡 | 102. 北野遺跡 |
| 11. 川野池遺跡 | 34. 船場遺跡 | 57. 山洋山遺跡 | 86. 電貫台遺跡 | 103. 甲小塚遺跡 |
| 12. 東阿寺跡 | 35. 十二軒池遺跡 | 58. 笹之山遺跡 | 87. 別所北遺跡 | 104. 甲小路北遺跡 |
| 13. 熱礼跡原所跡 | 36. 丁田遺跡 | 59. 船谷遺跡 | 88. 別所東跡 | 105. 甲小路南遺跡 |
| 14. 大久保C遺跡 | 37. 大陣遺跡 | 60. 羽倉崎東遺跡 | 89. 新庄寺(下)山東遺跡 | 106. 富代遺跡 |
| 15. 中野七 | 38. 堀之元遺跡 | 61. 船新東遺跡 | 90. 新庄東遺跡 | 107. 長生寺跡 |
| 16. 大久保D遺跡 | 39. 市家遺跡 | 62. 船場山遺跡 | 91. 新庄古墳群 | 108. 海会堂遺跡 |
| 17. 大久保E遺跡 | 40. 野ノ宮遺跡 | 63. 青見跡陣屋跡 | 92. 引谷池遺跡 | 109. 海会寺跡 |
| 18. 丸門遺跡 | 41. 宮ノ宮遺跡 | 64. 岡尻遺跡 | 93. 下村遺跡 | 110. 伝ノ地遺跡 |
| 19. 大塚中野池地 | 42. 北ノ南遺跡 | 65. 大塚南遺跡 | 94. 下村土母屋 | 111. 山ノ下遺跡 |
| 20. 大溝遺跡 | 43. 八王子跡 | 66. 船岡山南遺跡 | 95. 下村北遺跡 | 112. 高野遺跡 |
| 21. 小塚内遺跡 | 44. 嶋田遺跡 | 67. 榎井西遺跡 | 96. 新家遺跡 | |
| 22. 久保城跡 | 45. 土丸遺跡 | 68. 船場遺跡 | 97. 岡野山遺跡 | |
| 23. 久保遺跡 | 46. 土丸南遺跡 | 69. 堤ノ地遺跡 | 98. 上村遺跡 | |

図1 周辺の遺跡 (1/50,000)

第2節 文献による歴史的記録

文献史料における「日根野」の地名の初見は、『日本書紀』允恭天皇8年の条である。天皇が弟姫(衣通姫)のために「河内茅渟宮」を造り、しばしば日根野で遊猟に興じたと記されている。霊龜2年(716)に大鳥・和泉・日根3郡を分離して和泉監が設置される以前は、この地は河内国の範疇であった。茅渟宮は、現在の泉佐野市上之郷(日根野の南西)の地と推定されている。『日本紀略』によると、延暦22年(803)に桓武天皇の和泉国日根野行幸があり、『日本後紀』では翌年延暦23年(804)に、日根野や垣田野(貝田付近)、熊取野(熊取町)などで遊猟に興じたと記されている。さらにこの時、日根行宮を拠点としていたと記されているため、離宮のような施設がこの地に存在していたことがわかる。

天平10年(738)の『和泉監正税帳』(『正倉院文書』)には、日根郡大領日根造玉麴と撰主帳日根造五百足の名が見られる。日根造は、『新撰姓氏録』第29巻和泉国諸蕃に「新羅、日根造、新羅国人億斯富使主之後也」と記されている。億斯富使主は、どのような人物かは不明だが、日根野の地においてその一族である日根造が郡大領などに就いており、かなり勢力をもっていたことがわかる。日根造の本拠地は賀美郷(泉佐野市上之郷)であり、現存する式内社の日根神社は、もと億斯富使主を祭っていたと考えられている。茅渟宮推定地と同じであることから、古代において重要な地域であったといえる。

中世の日根荘に関する文献史料はかなり豊富で、文献史学分野では研究が進んでいる。すべてを網羅することは不可能であるため、詳細は先学譲り、ここでは大きな流れだけを述べることにする。史料の主なものとしては、荘園領主であった九条家に文書(日根荘関係文書)が多く残されているほか、九条政基が当地に滞在した際の詳細な日記(『政基公旅引付』)や日根野村絵図などが挙げられる。

当地は、もと東北院領長滝庄の東部から北東部にかけての荒野であった。元久2年(1205)に高野山の鑿阿上人が、貞応元年(1222)にも高野山の寺僧が開発を企てたが、いずれも長滝庄との間で用水路問題が発生し、失敗に終わっている。その後、天福2年(1234)6月に、関白九条道家の申請で官宣旨が下され、九条家領日根荘が成立した。文暦元年(1234)11月の『六波羅探題御教書案』に「和泉国日根庄」とみえる。鎌倉幕府と九条家のつながりは深く、源実朝が殺害された後の将軍は、九条道家の子頼経である。南北朝時代に活躍する日根野氏(中原氏)は、鎌倉時代後期に当地に勢力を伸ばし、文永9年(1272)には、九条家が、中原盛経を人山田村預所職に補任している。延慶3年(1310)には、荒野の開発を西大寺僧実専が請け負ったが、うまくいかず、正和5年(1316)には権利を没収された。建武3年(1336)には、九条道家が当知行地目録を作成し、足利尊氏が目録記載の九条家領を安堵している。ただ、『九条家文書』によると、室町時代に入ってからは武士による押領が続き、九条家は幕府に再三日根荘の回復を訴えていることが記載されている。

『政基公旅引付』は、前関白九条政基が、文亀元年(1501)3月から永正元年(1504)12月まで日根荘で執務を行った際の自筆日記である。政治的活動だけでなく、民衆の生活に直接触れた文化的一面もみることができ、当時の状況を詳細に記した史料として高い評価をうけており、様々な研究がなされている。中世後期は荘園領主の力が失われ、守護勢力が台頭する時期であるが、その中で日根荘は九条家荘園として存在した特色を持っている。九条政基が当地を離れた後は、根来寺僧明尊が代官となり、年貢銭などが京に送られていたが、天文2年(1533)11月以後、九条家の記録には残されていない。天正13年(1585)に太閤検地の一環として、九条家が奉行前田玄以に提出した「九条家不知行所々目録」の中に、和泉国日根荘が記載されている。16世紀中頃には、九条家領日根荘は消滅したようである。

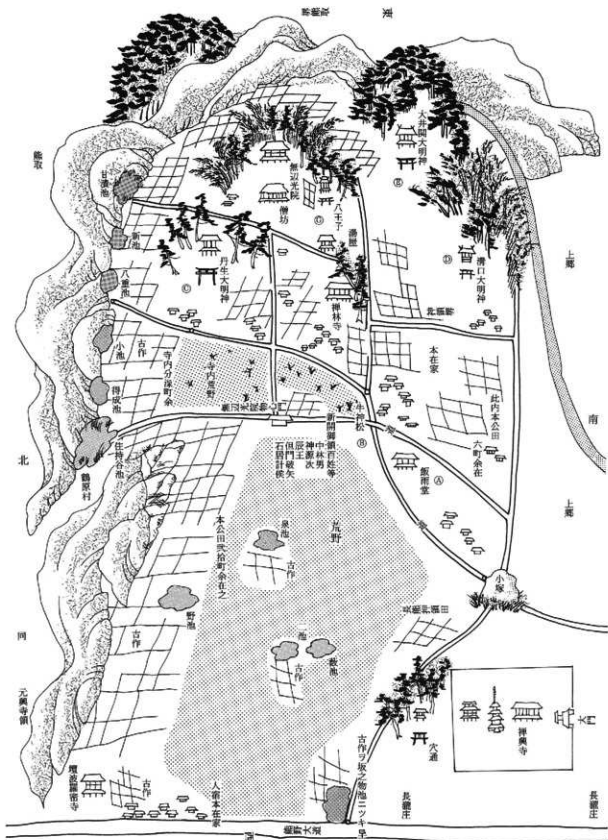


図2 和泉国日根野村絵図 正和五(1316)年(宮内庁所蔵のものをトレース)

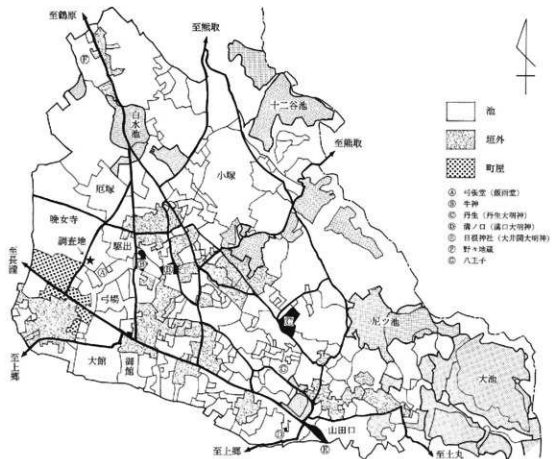


図3 日根野地区小字図

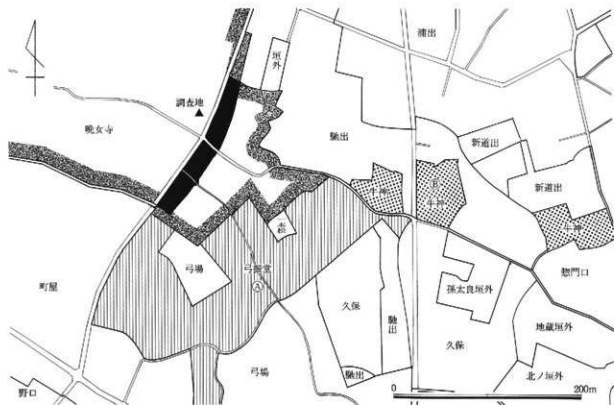


図4 調査区周辺小字図

第2章 調査にいたる経緯と経過

日根野遺跡は、前章で述べたように中世の日根荘の中心部分を占めており、絵図や文献史料などが残っていることから、考古学の分野よりもむしろ文献史学などで多く取り上げられている、全国的に著名な遺跡である。日根野遺跡の所在する泉佐野市は、大阪市と和歌山市のほぼ中間のいわゆる泉州地域南部に位置している。泉州沖に計画された関西国際空港建設に伴うアクセス道路や鉄道の建設（関西空港自動車道、JR・南海関西空港線）、関連施設建設および海岸部の埋め立て事業（りんくうタウン）などの開発が近年急激に進み、泉佐野市を中心とした地域における文化財調査もそれに伴い、件数が増加している。特に日根野地域を縦断するかたちで計画された空港連絡道建設に伴い、(財)大阪府埋蔵文化財協会による日根荘総合調査（平成元年度～3年度）や道路地内の発掘調査（平成元年度～4年度）が実施された。平成6年には関西国際空港が開港し、それに伴うアクセス道路や鉄道も完成したが、関連事業は継続して計画されており、日根野遺跡周辺においてもなお開発が進んでいる。

今回の調査地は、JR阪和線日根野駅の南側に位置しており、日根野遺跡の北西端部にあたる。この地域は空港連絡道が完成したが、旧来の道路のみでは交通量の増加に対応できないため、新たな道路の建設が必要となった。このため日根野駅南側の区画整理に伴い、大阪府土木部により4車線の主要地方道大阪和泉南線新設事業が計画された。道路設置予定地が、日根野遺跡の範囲内におよぶことから、平成7年5月大阪府教育委員会文化財保護課により、日根野駅南側から空港連絡道に至る予定地内で試掘調査が実施された。この時の調査により、空港連絡道寄りの部分で遺物包含層や遺構面が良好に残存していることが確認されたため、本調査の必要性があると判断された。これを受けて、平成8年3月大阪府土木部より(財)大阪府文化財調査研究センターに発掘調査の依頼があり、5月より現地での発掘調査を行うこととなったものである。



図5 調査区位置図 (1/2,500)

第3章 調査の方法

トレンチの位置と呼称 道路予定地は、現況道路の拡幅および新設される部分から成っており、調査地は空港連絡道に取り付く部分にあたる。当初、空港連絡道に接続する部分から調査を行う予定であったため、空港連絡道側から地区割り（1～7区）を行った。ところが、調査開始までに用地買収が完了せず、1区と2区は調査に着手できなかったため、調査は3区から始まることとなった。調査地は現況道路の拡幅部分であるため、交差する道路や水路で地区割りをを行った。5区には調査前まで道路に面した建物が存在しており、地表面が擾乱を受けていたことから4区と分けた。6区は中央部を小水路が横切っているため、北半部と南半部に分けて調査した。

調査の方法 調査は、盛上・耕作土をバックホーで掘削した後、層位ごとに人力掘削により掘削を進めた。層位は、後述するように調査区によって異なる部分があり、3～4面となったが、各調査区ごとに遺構面を設定して、後に整理の段階で全体の面をそろえることとした。したがって、調査時における遺構面は必ずしも統一はされていない。土層観察断面は、基本的には調査区東側（南北断面）と各調査区の北側（東西断面）に設定した。ただ、5区は擾乱が土層観察断面に及んでいたため、観察ができなかった。また、3区は東から西へ下がる地形のため、調査区西側においても土層観察を行った。

遺構番号 遺構番号は、遺構の種類別、検出順に付した。このため、同一遺構面でも遺構番号が必ずしも連続していない。

遺物の取り上げ 遺物の取り上げは、国土座標第Ⅵ系をもとにした当センターの地区割り方法を用いている。

記録の方法 遺構全体の実測作業は、最終面に関してはヘリコプターによる写真測量および図化作業（1/20と1/100）を測量業者に委託して行った。他の遺構面の全体図や遺構図は、平面測量を行った。土層断面図は、1/20で統一して実測を行っており、遺構平面図に関しては全体図を1/100、遺構図はその都度適当なスケールを使用している。また、記録写真に関しては遺構全体、遺構、土層断面などを35mmカメラ（モノクロ、カラー）と適宜6×7カメラ（モノクロ、カラー）を使用して撮影を行った。

整理作業 出土遺物は、調査区・地区・層位・遺構別に登録後、順次洗浄・注記・接合・復原を行った。整理の過程で、出土遺物の観察・個体数の確認などを行ったほか、遺物を選別して実測を行った。実測可能な遺物が少ないことから、破片でも残存状態のよいものを中心に写真撮影を行い、本書に掲載した。

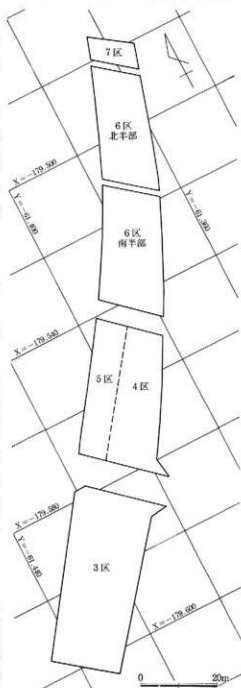


図6 トレンチ位置図

第4章 調査成果

第1節 基本層序

調査区全体では、7区から3区（北から南）に向かって緩やかに地山面が下がっており、高低差は約1mを測る。7区と6区の間で、約50cmの段差が認められ、調査区の北側に現在もみられる段差が、本来この部分にあったものと推定される。7区を除いておおむね盛土・耕作土、床土、遺物包含層の層序が確認された。遺物包含層は、地区によりやや異なる部分もあるが、全体で大きく4層に分けることができ、ほぼこの範囲内におさまるものと考えられる。7区では、遺物包含層がほとんどみられず、盛土・耕作土を除去すると地山面になる部分が多く、6区より南側の部分と様相が異なる。基本層序の時期は、比較的遺物の出土量の多い6区をもとに判断した。

盛土・耕作土層 近現代の耕作土層と盛土層である。5区以外は、調査前まで耕作地として利用されており、約20cmの厚さの耕作土が良好に残存していた。5区は、宅地として造成されていたことから盛土が施されており、建物の基礎などによる攪乱や削平もみられ、耕作土はほとんど残存していなかった。

床土層 近現代の耕作土に伴う床土層である。ほぼ調査区全体で良好に残存しており、層厚は約10cmを測る。基本的にはシルト層で、細粒砂を含む。

包含層1層 近世の作土層と考えられる。黄褐色シルト(2.5Y5/3)が基本で、褐色粘土を多く含む。マンガンや鉄分の沈着が多くみられ、硬くしまる。一辺2cm程度の砂岩角礫や炭化物を含む。ほぼ調査区全体にひろがるが、3区では確認できなかった。層厚は5～15cmを測り、4区で最も厚く堆積している。遺物は染付や近世陶器などが出土している。包含層1層除去面を1面とした。

包含層2層 中世後期から近世初頭の作土層と考えられる。黄灰色シルト(2.5Y6/1)が基本で、径5cm程度の礫を含む。マンガンの沈着が若干みられ、1層に比べてややしまりが悪い。ほぼ調査区全体にひろがるが、6区南端部と3区南半部では確認できなかった。層厚は5～15cmを測り、6区北半部と4区で厚く堆積している。瓦器羽釜や甕、すり鉢などが出土している。包含層2層除去面を2面とした。

包含層3層 古代末から中世前期の作土層と考えられる。褐色灰色粘土混じりシルト(10YR5/1)が基本で、マンガンの沈着が多くみられ、硬くしまる。調査区全体にひろがるが、6区南端部では確認できなかった。この部分の北側と南側では様相が異なる。北側の6区では、上記の1層のみで層厚10～15cmを測るが、南側の3～5区では層厚は10～30cmとなり、4層に分けることができる。3-1層は、黄褐色シルト(2.5Y5/3)が基本で、黄褐色粘土を多く含む。マンガンや鉄分の沈着が若干みられる。層厚は約10cmを測る。3-2層は、6区の土層に対応するものと考えられ、土器片を多く含んでいる。層厚は4区では約10cmであるが、3区では厚くなり、20cm以上の部分もある。3-3層は、黄褐色シルト(7.5YR7/8)が基本で、マンガンの沈着が若干みられる。3区東端部では確認できないが、4区から3区にかけてひろがり、層厚は5～15cmを測る。3-4層は、明黄褐色シルト(10YR6/8)が基本で、黄褐色粘土を多く含む。層厚は約5cmを測る。遺物は出土していないため、地山上面の粘土層の可能性もある。これらの層の違いは耕作の単位の差によるものと考えられるが、遺物量が少ないことから、明確な時期差ははっきりしない。遺物は須恵器や黒色土器のほか、瓦器碗が出土している。ただ、ほかの遺物包含層に比べると、遺物量ははるかに少ない。包含層3層除去後の地山面を3面とした。

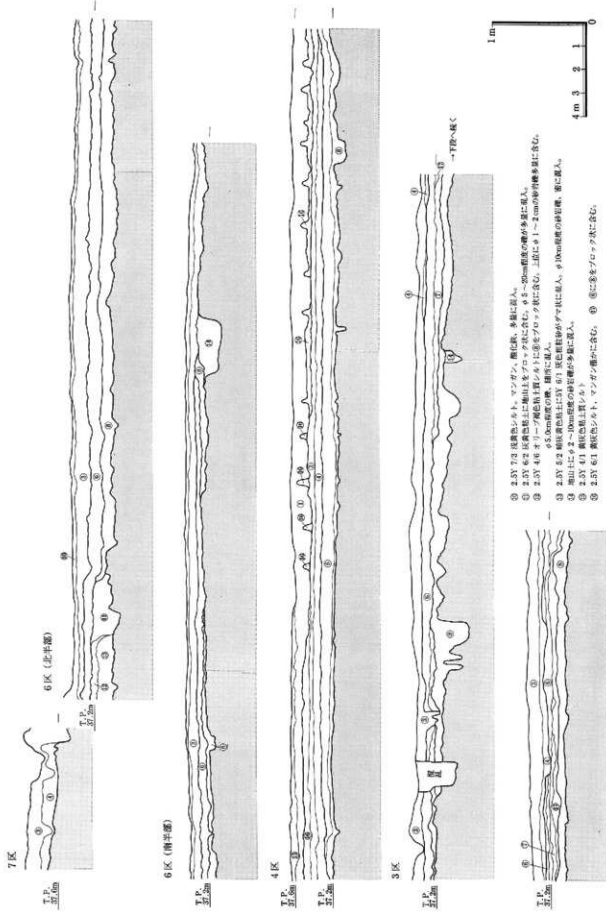


図7 調査区東横断面図

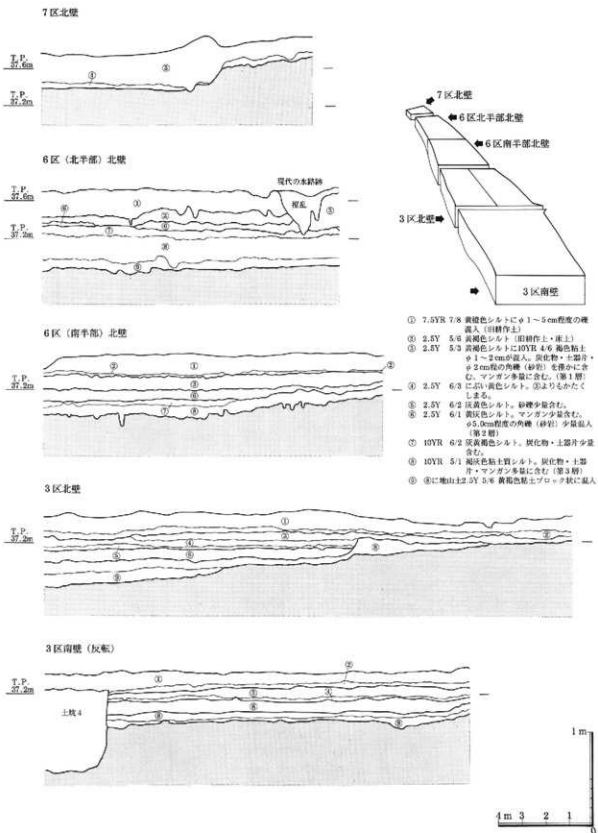


図8 調査区横断面図

第2節 遺構

1. 3区

調査区の南端に位置している。規模は、南北方向約50m、東西方向約20mを測る。南西～北東方向にのび、方形を呈しているが、北東部がややひろがる。地山面が東方向に上がっているため、遺物包含層は南西部では良好に残存していたが、北東部では徐々に薄くなる。調査区東端部には、現地表面から縦方向の段差が認められ、さらに西半部においても横方向の段差が確認できる。

調査前は耕作地であったことから、耕作土・床土層は良好に残存していた。これらの層を除去した面

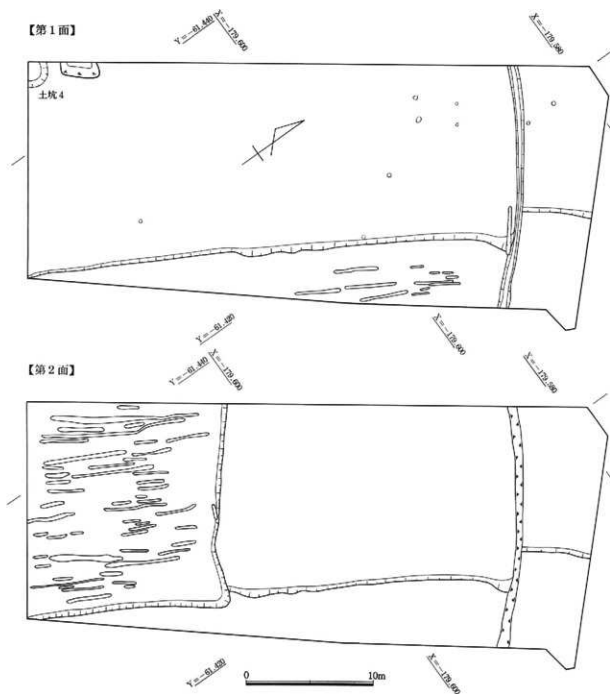


図9 3区第1面、第2面遺構平面図

では、溝と土坑が検出された。溝は、北部で調査区を横断するかたちで検出された。規模は、幅約1m、深さ約0.2mを測り、断面半円形である。埋土には耕作土が入っており、遺物は出土していない。耕作に伴う水路として使われていたとともに、耕作地の区画を表していたものと考えられる。調査区東部の段差は、この溝と交差する部分で位置が変わっており、この水路による区画がかなり意味を持っていたことがわかる。

土坑4は、調査区南西端部で検出された。大部分が調査区外にひろがることから、全形は確認できなかったが、楕円形を呈するものと考えられる。検出部分での規模は、東西方向2.6m、南北方向1.4m、深さ0.8mを測る。径10cm程度の礫とともに、瓦や土師器焙烙、陶磁器、染付などが多く出土した。いずれも廃棄されたものと考えられ、雑然としており一気に埋められた様相を示している。断面観察により、土坑が埋められた後、耕作土・床土を上面に盛る際に、この部分が陥没しないよう大きめの礫を集めて、埋土上面に置いている状況が観察された。遺物量は比較的多いが、破砕が著しく、完形になるものはあまりない。遺物の時期は、近世末から近代にかけてのものがほとんどである。

包含層1層は南西部に残存するのみであったため、1面相当面は全面では検出できなかった。土師器や瓦器、陶磁器の小片が出土している。床土除去面で検出された調査区東部の段差や区画は、この面でも確認されたため、中世以降現在までこの区画が存続していたことがわかる。耕作面と考えられるが、鋤溝などの耕作に伴う遺構は、東部を除いてほとんど検出されなかった。鋤溝は、東部の一段高い区画内で検出された。段差の方向と平行に並んでおり、さらに調査区外にひろがる。規模は、幅0.1~0.2m、深さ3cm程度、長さは長いもので4mを測るが、比較的短いものが多い。遺物は出土していない。中央部でピットが数基検出されたが、柱穴の可能性は低く、建物が存在したことは考えにくい。また、遺物は確認できなかったが、銅製品からの錆のひろがりによる径10cm程度の円形の変色部分が、北半部で数箇所検出された。これにより、銭貨などの銅製品を耕作地に置いたか、まいた状況を確認することができた。このことについては、6区の項で詳述する。

包含層2層は、南西部で比較的良好に残存していたが、北東部では徐々に薄くなる。土師器や瓦器、

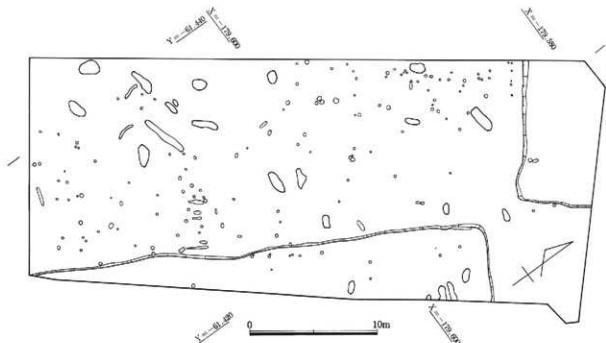


図10 3区第3面遺構平面図

陶磁器の小片が出土している。地山面がゆるく傾斜していることから、2面では段を設けて田地を確保している状況が確認された。この面の時期に、本格的な整地が行われたものと考えられる。調査区東部の段差はこの面で形成され、西側の一段低い部分では、さらに南部でゆるい段差が設けられている。南部の区画が最も低い、この区画が形成された際、一部東側の段差まで食い込んでいることが確認された。また、この区画では、調査区にほぼ平行する方向の鋤溝が多く検出された。規模は、幅0.1~0.5m、深さ3~10cm、長さは長いもので11mに及ぶものもみられるが、2~3mのものが多く。遺物は出土していない。南部より一段上の中央部からは、鋤溝などの遺構は検出されなかった。整地の際の削平をうけている可能性もあるが、ピットや土坑などは検出されていないため、耕作地として利用されていたものといえる。

包含層3層は、2層に比べて比較的良好に残存していたが、遺物の出土量は少なく、2層との時期差ははっきりしない。また、南壁の断面観察により、包含層4層が確認されたが、掘削時には明確に分けることができなかつたため、地山面を検出することとした。4層の遺物量は極端に少ないことから、時期は確定できない。掘削時の観察で、3層除去面において、鋤溝が部分的に検出されていることから、6区の3層除去面（3面）とは状況が異なる。地山面では鋤溝は検出されず、土坑やピットが点在しており、6区の3面と同様の状況であることから、この面を3面相当面とした。土坑やピットは不定形のものも多く、遺物も出土していないことから、ほとんどが人為的な掘削によるものというよりは、樹木などの植物の痕跡の可能性が高いものと考えられる。ピットにも規則性などは認められず、柱穴と判断できるものはない。

2. 4・5区

調査区の中央部に位置している。規模は、南北方向約35m、東西方向約15~20mを測り、南東部がややひろがる。調査前に東半部を4区、道路に面した西半部を5区としたが、遺構の検出状況から両地区

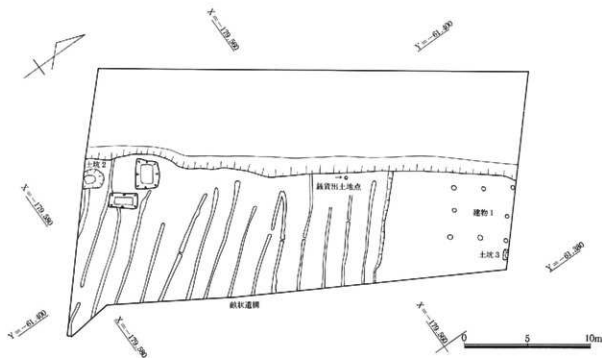


図11 4区第1面遺構平面図

を分割する意味はないと判断したため、まとめて記述することとする。5区には調査前に建物があったため、柱の基礎などによる攪乱が多く存在する。また、建物がつくられる時点で面が一段低くなっていた。このように、4区と5区では遺物包含層の残存状況が異なっていることから、遺構面の検出状況も同一ではない。基本層序における対応関係から、4区では遺構面を1面、2-1面、2-2面、3面としたが、5区においては、確認できなかった部分もある。

表土の耕作土を除去した面（1面の上面）において、4区と5区の境界をなす段部分で径30cm程度の石を並べた石組が検出された。石組は一段のみで、上面を削平されている様子は確認できないため、本来この規模の石組であったことが推測される。耕作地の区画を明確に示すもので、現在でも周辺の耕作地で見ることができる。現在みられる石組でも、1～2段程度の簡単なものであることから、特に土留めなどを意識したものではないようである。遺物の出土はないため、石組の築かれた時期は明確ではないが、表土の耕作土に覆われていたことから、近代以降のものと考えられる。さらに、同一面では4区の北東端部に建物1が検出された。礎石を持つ建物で、規模は2間(4.2m)×2間(4.0m)、柱間約2mを測る。礎石には比較的平台い石が選ばれており、径約40cm、深さ約20cmの柱穴すべてに入れられていた。建物1は、4・5区と6区を分断する道に面しており、農作業用の小屋である。このような小屋は、周辺に数多く現存しており、その構造を知ることができる。ほぼ正方形のものが多く、2間×2間あるいは2間×3間の規模で、木材を組み合わせて築かれており、壁はなく屋根はトタン葺きのものが多い。通称たまねぎ小屋で、主として収穫したたまねぎを陰干して乾燥させるために使われている。調査地周辺の泉州地域では、たまねぎ栽培が近代以降盛んで、現在でも主要な農産物の一つである。このことから、この地域では耕作地1枚単位にたまねぎ小屋があるほどである。最近では、農作業用の耕運機などを置くようになったことや、開発に伴う耕作地の減少から、その数は減っている。柱穴から遺物は出土していないため、時期ははっきりしないが、古くても近代以降のものと考えられる。なお、近所の人の話によると、この建物は調査前に解体されたとのことである。

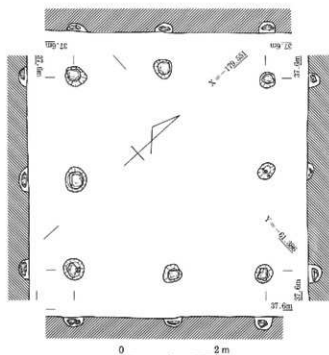


図12 建物1平面・断面図

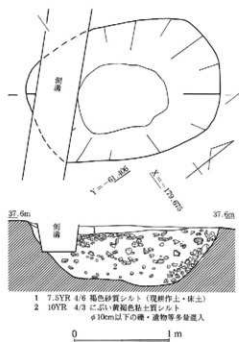


図13 土坑2平面・断面図

包含層1層は、5区では削平により残存していないため、1面相当面は4区のみで検出で、土師器や瓦器、陶磁器などが出土している。北部が段差を設けてやや高くなっており、中部から南部にかけてが低い。南端部で土坑2、北端部で土坑3が検出された。土坑2は楕円形を呈しており、長径2.0m、短径1.4m、深さ約0.6mを測る。径10cm程度の礫とともに、瓦や土師器、陶磁器、染付などが多く出土しており、廃棄土坑と考えられる。埋土や遺物の検出状況から、掘削してまもなく一気に埋められた様相を示している。3区の土坑4と同様に、遺物の埋没状況にも規則性はなく、雑然としている。ここでも、土坑が埋められた後、耕作土・床土を一面に盛る際に、この部分が陥没しないように比較的大きめの礫を集めて、埋土上面に置いている状況が観察された。遺物の時期差はほとんど認められず、ほぼ近世末のものである。土坑3は方形を呈しており、長辺0.8m、短辺0.2m、深さ約0.2mを測る。瓦や土師器、

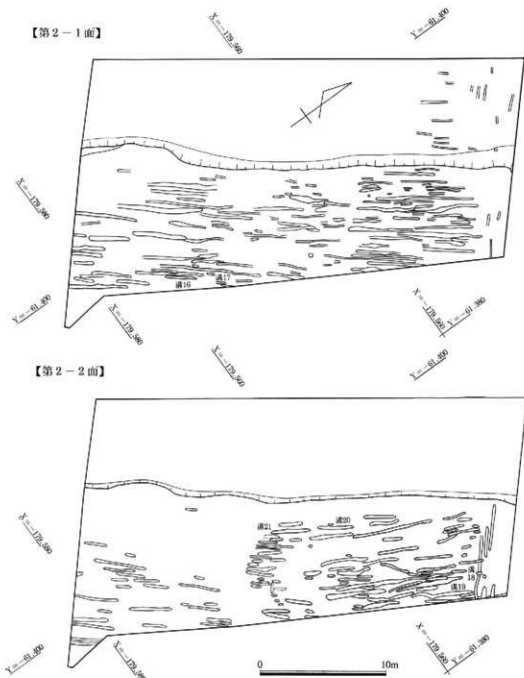


図14 4・5区第2-1面、第2-2面遺構平面図

陶磁器などが出土している。時期は近世で、道端に掘られた廃棄土坑と考えることができる。

中部から南部にかけての一段下がる部分で、調査区にほぼ直交する方向の畝状遺構が検出された。断面三角形で、規模は高さ約10cm、幅約20cmを測り、約1.5m間隔でほぼ平行に並ぶ。断面観察により、盛土によるものではなく、掘り残しでつくられていることがわかる。耕作に伴うものと考えられるが、どのような施設なのかは不明である。他の調査区では、同様の遺構は検出されていない。なお、この面では鋤溝などの耕作痕は認められない。また、4区においても3区でみられた、銅製品からの錆による変色部分が1カ所検出された。ほとんど原形をとどめていなかったため、製品は特定できなかったが、ここでも銭貨などの銅製品を耕作地に置いた状況が確認できた。

包含層2層は、4区で厚く堆積していたことから、さらに2面に分けることができた。包含層2層からの遺物の出土量はわずかで、土師器や瓦器の小片のみみられる程度である。

2-1面は、4区では5区との段に平行する方向の鋤溝が多く検出された。5区では全体に削平をうけていることから、遺構の残存状況は悪く、北部でわずかに鋤溝が確認された程度である。4区と同様に、段に平行するものがあるが、北端部で直交するものも確認された。切り合い関係から、直交する溝のほうが古いことがわかる。鋤溝のうち、遺物が出土したのは溝16と溝17であるが、いずれも土師器の小片で、形を復元することはできなかったため、時期を特定することはできない。

2-2面は、4区のみで確認され、2-1面と同様に、段に平行する鋤溝や耕作に伴う溝が多く検出された。ただ、北半部の溝は、2-1面の溝とはやや方向がずれており、時期差が認められる。また、北端部で直交する溝が検出されており、切り合い関係から、直交するもののほうが古い。直交する溝は、全面では確認されず、北端部の道に面した部分でのみ検出されている。鋤溝のうち、遺物が出土したのは溝18-21であるが、いずれも土師器や瓦器、陶器の小片で、時期を特定することはできない。2-1面と2-2面の時期差は、遺物の出土量がわずかであることから、はっきりしない。

3面では、北半部で土坑やピットがみられるほか、南半部で溝が数条検出された。鋤溝は検出されず、

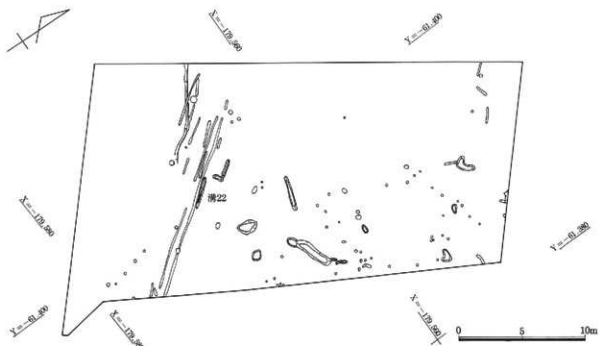


図15 4・5区第3面遺構平面図

耕作の痕跡は認められない。土坑は不定形のものが多く、遺物が出土していないことから、人為的に掘削されたものというよりは、樹木などの植物の痕跡の可能性も考えられる。ピットも柱穴と判断できるものはなく、建物の存在は考えにくい。この中で、溝は明らかに人為的に掘削されたもので、調査区をほぼ垂直に横切っている。規模は、幅約10cm、深さ10～20cm以上を測り、部分的にはかなり深いところもある。まとめて同じ方向の幅の狭い溝が検出されたことから、轍の可能性も否定できないが、樋などを埋設した暗渠のようなものと推測することができる。ただ、樋の痕跡は確認されておらず、途中で途切れるものが多いことから、断定することはできない。この部分の溝22から、土師器臺と考えられる土器がまとめて出土した。磨滅が激しく、形を復元することができないため、時期ははっきりしないが、中世以前の可能性もある。

3. 6区

調査区の北部に位置しており、南北方向約60m、東西方向約12～17mの規模で、南部がややひろがる。調査区の中央部を水路が横切るため、調査区が分断されているが、一つの調査区として扱うこととする。遺物包含層は良好に残存しており、擾乱もないことから、遺構面の確認が比較的容易で、今回の調査における基本層序や遺構面の判断の基準となった。地山面は北方向に上がっており、北端部と南端部との比高差は約0.3mを測る。調査前は耕作地であったことから、耕作土・床土層は良好に

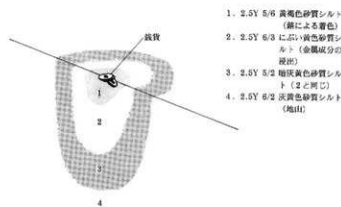


図16 銭貨出土状況模式図

1. 2.5Y 5/6 黄褐色砂質シルト (跡による着色)
2. 2.5Y 6/3 に近い黄色砂質シルト (金属成分の浸染)
3. 2.5Y 5/2 暗灰黄色砂質シルト (2と同じ)
4. 2.5Y 6/2 灰黄色砂質シルト (地山)

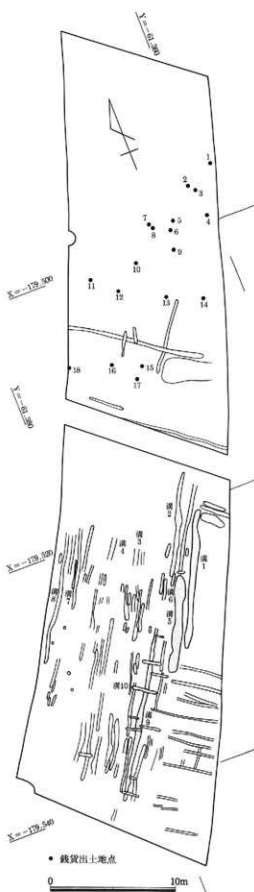


図17 6区第1面遺構平面図

残存していた。ただ、これらの層を除去した面では、遺構は検出されなかった。

包含層1層からは、土師器や瓦器、須恵器、陶磁器などが小片であるが、比較的多く出土している。1面では、北半部でピット、南半部で鋤溝や耕作に伴う溝などを検出した。ピットは柱穴とは考えにくく、建物は復元できない。南半部で多く検出された鋤溝や溝は、調査区にはほぼ平行する方向のものが多く、南東部で直交するものも認められる。耕作地の形状にあわせたものといえる。切り合い関係から、調査区に平行する方向のものより、直交するものほうが新しいことがわかる。鋤溝は、いずれも深さは5cm以下で、途切れていたり、痕跡程度しか残存していないものもある。鋤溝からは遺物がほとんど出土していない。溝は、鋤溝よりも規模が大きく、遺物が出土するものが比較的多い。ただ、遺物が出土した溝は溝1～10であるが、いずれも土師器や瓦器の小片であり、形を復元できるものはない。

1面では、このほかに銭貨や小型銅製品が北半部で点在して検出された。南半部では確認されていない。同様の検出状況は、3区や4区でも確認されているが、6区ではまとめて検出され、残存状況を観察することができた。銭貨が確認できた例では、開元通寶や元豊通寶などがみられ、中世に流通した中国銭である。小型銅製品は用途不明品であるが、大きさは銭貨と同じか小さいものである。また、錆が確認されたものの、製品が残存していないものも多い。当初、これらの銅製品は、ピット状の変色部分から検出されたため、単純にピットからの出土遺物と判断していた。特に、最初に検出されたp6では、熙寧元寶や聖宋元寶が重なって出土したことから、埋納ピットの可能性を考えていたのである。ただ、出土位置がピット状の変色部分の底部（ピットとすれば最下面）ではなく、中央部（ピットとすれば底部より上）であることから、埋納されたものかどうかの判断が下せない状況であった。検出時の断面観察では、銭貨から直接放射状に錆がひろがっている状況は明確に認められ、その外側にピットの埋土と考えられる筒型の暗褐色に変色した土がみられた。ただ、細かい観察によれば、ピットのように見える筒型部分も、色は異なるものの、土質は

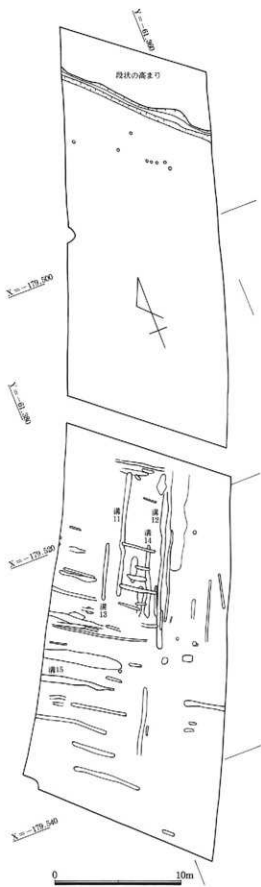


図18 6区第2面遺構平面図

周囲とあまり変わらないため、銅製品の錆による変色の可能性が高いと考えることができた。また、これらのビット状の変色部分の分布には、規則性は認められず、掘立柱建物の柱穴や建物に伴う地鎮ビットなどの可能性は低い。このことから、これらの銭貨や小型銅製品はビットに埋納されたものよりは、地面に置かれた状態であったと考えることができる。ただ、人為的に置いたものか、撒かれたものか、偶然散らばったものかの判断はできない。同様の例は、泉佐野市中嶋遺跡や中間遺跡でも検出されており、現状では地鎮などに伴う地域的な習俗によるものの可能性を示すにとどめる。

包含層2層からは、土師器や瓦器羽釜・甕、須恵器などが多く出土しており、1層よりも出土量は多い。2面では、ビットや溝などが検出されたが、北半部ではほとんど遺構はみられない。わずかに北端部にビットが検出されたが、建物に伴うものではなく、標列などの可能性が考えられる。南半部では、耕作に伴う溝が多く検出された。溝は、1面で検出された鋤溝と同じ方向のものである。切り合い関係から、調査区に平行する方向のものより、直交するもののほうが新しいことがわかる。遺物は、溝11~15から土師器や瓦器などが出土しているが、いずれも小片で形は復元できなかった。遺物による溝の時期差は明確ではない。調査区に平行する方向の溝が1面に対応し、直交する方向の溝が2面に対応する可能性も考えられる。溝の規模は2面検出のものの方が大きく、深さ20cmを測るものもみられる。北端部では、調査区に直交する段状の高まりが認められ、約30cm高くなる。この段状の高まりについては、後述する。

包含層3層からは、土師器や瓦器碗、須恵器などが出土しているが、1層や2層に比べると出土量は極端に少なくなる。

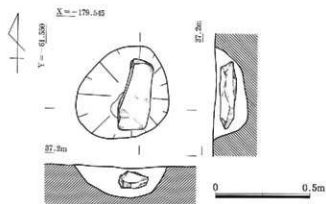


図19 ビット22平面・断面図

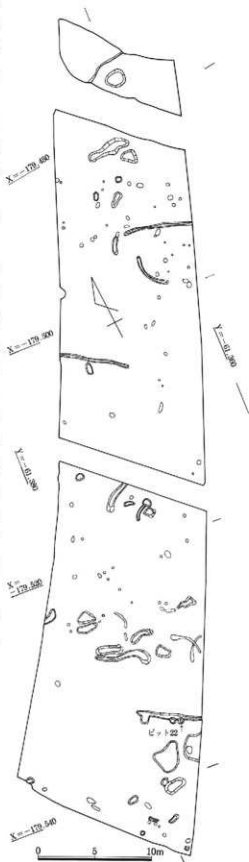


図20 6・7区第3面遺構平面図

3面では、ピットや溝、土坑などが検出されたが、鋤溝や耕作に伴う溝はみられない。ピットも建物を構成するほどの規格性は認められず、建物の存在は確認できない。ただ、南半部で根石の入ったピット22が検出された。径約50cm、深さ約20cmを測り、中に偏平な石が入れている。建物に伴うピットの可能性が高いが、ほかに同様のピットは検出されておらず、単独である。ただ、調査区の縁辺部での検出であることから、この部分より調査区外へひろがる建物の存在は否定できない。土坑はいずれも不定形で、規則性は認められないが、埋土に径5cm程度の礫を多く含むものがある。遺物が出土していないため、時期は確定できない。地山が礫層の部分もあるが、土坑内の礫の堆積状況は異なっており、人為的に埋められたものと考えられる。

2面で確認された、北端部の段状の高まりは、径約5cmの礫を多く含む層で構成されており、人為的に盛られた様相を呈している。幅約4m、厚さ約30cmの規模で確認され、調査区北側の自然地形の段差に沿うように調査区を横切っている。段状の高まりを構成している礫層からは、古墳時代のものと考えられる須恵器のみが出土している。ただ、この遺物が段状の高まりを構築した時期を示すものか、構築した礫層に偶然混入していたものかの判断ができないため、時期を特定することはできない。平面では3層との関係ははっきりしなかったが、断面観察により、段状の高まりを構成する礫層の上に3層があることが確認された。このため、前後関係から段状の高まりは中世以前に構築されたことが考えられる。この段状の高まりの性格であるが、自然地形の段差部分につくられた水路に沿っていることから、道路のような意味をもつ可能性を考えることができる。

4. 7区

調査区の北端部に位置する。北側には高さ約1.5mの自然地形の段があり、調査区に対して垂直方向に延びている。7区と6区を画する水路部分で、さらに約50cm程度の段差が認められ、6区より高い。調査前にはこの部分に農作業用の小屋が建てられていたことや、排水用の簡易な水路が横切ってつくられていたことから、整地による削平や攪乱がみられる。耕作土と盛土を除去した時点で、厚さ約10cmの遺物包含層が認められ、その下が地山面となった。中央部をほぼ東西に横切る水路より北側は、削平による整地のため低くなっており、遺物包含層はほとんど残存していなかった。遺構は、中央部で土坑が1基検出されたのみであるが、遺物は出土していない。遺物包含層からの遺物は、近世から現代のもので、整地が近世以降に行われたものといえる。現在、調査区北側にみられる段が、もともと7区と6区の境界部分までひろがっており、近世以降に農地拡張のため、この部分を削ったものと考えられる。

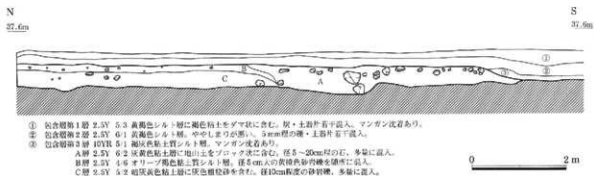


図21 段状の高まり 断面図

第3節 遺物

全体に遺物の出土量は少ない。遺構からの出土遺物はほとんどみられないが、4区土坑2と3区土坑4で近世遺物が大量に出土している。遺物包含層は良好に残存している部分が多いが、包含層からの出土量は少なく、復元に耐えられる遺物もほとんどみられない。古くは縄文時代の石器から、近世の陶磁器や瓦までみられるが、遺物の総数でみるとほとんどが近世遺物で占められている。ここでは、時期が確定できる遺物のみを取り上げ、出土地区に関係なく時期別に記述することとする。

1. 石器 (図22)

縄文時代と弥生時代の石鏃が出土している。いずれも遺構に伴うものではなく、遺物包含層や後世の遺構から出土したものである。出土地点も点在しており、特に集中はみられない。また、同時期の土器なども出土していない。後世の整地の際にもたらされたものと考えられるが、著しい磨滅はみられないことから、調査地周辺のあまり離れていない部分に、同時期の遺構や遺物包含層が存在した可能性が考えられる。

14・76は凹基式石鏃である。いずれも基部の抉りの大きい点から、縄文時代のものと考えられる。2点ともに表面・裏面中央に少しだけ大剝離面を留めるが、周縁からは丁寧な調整剝離が施されている。また、先端部と脚部が欠損しているが、76は先端部欠損後、再加工している。64は基部の抉りの浅い凹基式の石鏃である。裏面中央に大剝離面を留める。周縁からの剝離は14・76ほど丁寧ではなく、厚みを残す。おそらく、縄文時代晩期から弥生時代前期頃のものと考えられる。先端部が欠損している。

141は円基式石鏃である。裏面中央に大剝離面を留める。周縁からの剝離は縄文時代のものほど丁寧

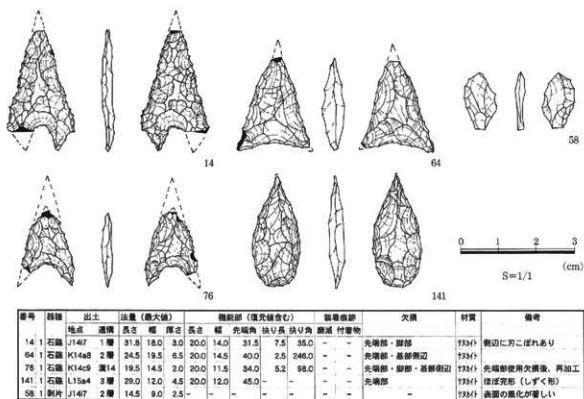


図22 出土遺物 (石器)

ではないため、弥生時代中期頃のものとは推定される。ほぼ完形であるが、先端部がわずかに欠損している。

58は石槍製作時に剝離調整してできた剝片と考えられるものである。全体に表面の風化が著しい。表・裏面ともに大きく大剝離面を留める。片側縁に調整剝離痕がみられるが、調整剝離段階で破損したものでどうかははっきりしない。

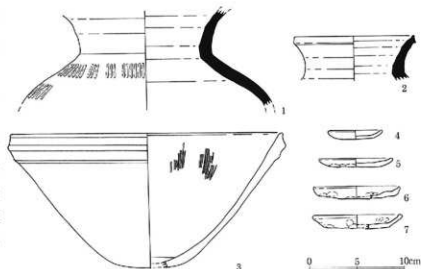


図23 出土遺物（包含層出土）

2. 古代～中世（図23・24）

古墳時代から中世にかけての遺物は、少量ながら出土している。復元可能なもののみ、図化しているが、いずれも包含層出土である。また、6区で検出された銭貨のうち、文字がはっきり確認できたもののみ、拓本を掲載した。

図23-1は須恵器甕で、頸部から肩部のみ残存している。肩部外面には平行叩き目が残るが、内面はナデにより磨り消されている。7～8世紀のものと考えられる。2は須恵器壺で、口縁部のみ残存している。6世紀のものと考えられるが、横瓶の可能性もある。3は瓦質搗鉢である。残存状況が悪いが、調整などははっきりしないが、体部外面に横方向のヘラ削りの痕跡を留める。口縁部の形態から、14世紀代のものと考えられる。4～7は土師器小皿である。いずれも残存状況が悪く、調整などは不明である。7の口縁部には煤が付着していることが確認されたため、灯明皿として使用されていたことがわかる。形態的特徴から、13～14世紀代のものと考えられる。

図24-1・2はp6で重なって出土した銭貨の一部である。1は開元通寶で、径2.3cm、厚さ1mmを測り、完形であるが、裏面に別の銭貨が付着している。初鋳は唐代(621)である。2は熙寧元寶で、一部欠損しているが、径2.4cm、厚さ1mmを測る。初鋳は北宋代(1068)である。3は聖宋元寶で、1/4程度残存しているのみであるが、「宋」の部分が確認できた。初鋳は北宋代(1101)である。

3. 近世（図25）

近世から近代にかけての遺物は、多く出土している。前述したように、廃棄土坑と考えられる4区土坑2と3区土坑4の出土遺物がそのほとんどを占めている。

図25上の遺物のうち、10は3区土坑4、それ以外は4区土坑2から出土したものである。

1～4は、19世紀の伊賀信楽窯系である。1は土瓶蓋、2は鍋、3は土瓶、4は急須の把手である。このうち、2・3は在地でつくられたものと考えられる。4の表面には「壽」の陽刻が施されている。5は土師質の土鍾である。細い管状を呈するが、時期は不明である。6は18世紀の伊部手の瓶である。体部の片側を指で押さえて窪ませている。7～11は、18世紀の波佐見窯系染付碗である。7～9には草花文、10にはコンニャク印判手、11には二重網目文の文様が施されている。7・9は、高台接地部分の



图24 出土遺物（錢貨）

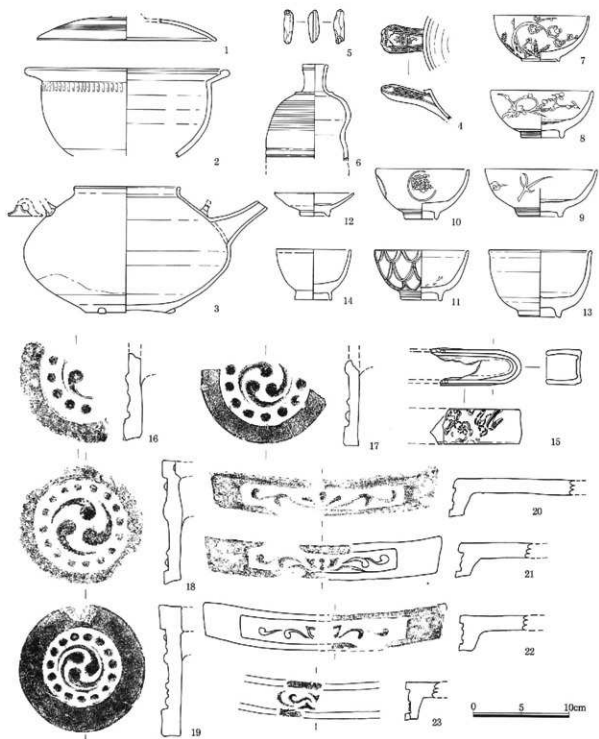


图25 出土遺物（瓦·陶磁器）

み無釉である。12は、波佐見窯系白磁皿である。高台接地部分のみ無釉で、ここに細かい離れ砂が付着している。13は、18世紀の肥前窯系碗である。14は、19世紀の瀬戸小碗である。

15は、18世紀の瀬戸髷洗いである。平面は楕円形状を呈しており、外面には摺絵による文様が施されている。底部外面のみ無釉である。16～23は、4区土坑2から出土した軒瓦である。16～19は巴文軒丸瓦である。いずれも外区の幅が比較的広く、珠文も大きくて数が少ない。内区の巴文は頭が丸く、尾が短い。20～23は唐草文軒平瓦である。いずれも段頸で、脇区が広く、唐草文様は退化している。

第5章 まとめ

主要地方道大阪和泉南線建設に伴う発掘調査によって、口根野遺跡のうち全長約160m、幅約20mの調査区内で、中世から現代に至る遺構や遺物が検出された。ここでは、調査区全体の遺構の変遷を時代順に簡単に整理してまとめにかえることとする。

調査に先だって行われた大阪府教育委員会による試掘調査において、遺物の検出状況から遺構がひろがるのが予想された。この調査は、2m×1mのトレンチ掘削のみであったが、溝が確認されたほか、奈良時代の須恵器や瓦器、近世陶磁器などが出土した。

本調査では、古代以前の遺構は検出されておらず、明確な遺物包含層も確認できなかった。遺物に関しては、混入品で縄文時代や弥生時代の石器が出土している。他に同時代の土器などは出土していないが、石器に著しい磨滅がみられないことから、付近にこの時期の遺構や遺物包含層が存在した可能性は否定できない。また、古墳時代についても遺構は検出されていないが、須恵器が出土している。6区では、径約5cmの礫を人為的に盛り上げてつくられた段状の高まりが検出されており、古墳時代の須恵器が出土している。この遺物が時期を示しているとはいえないが、土層断面の観察により、中世以前につくられたことは確実である。現存する高さ約1.5mの自然地形の段差に沿ってつくられていることから、道路のような意味をもつものといえる。中世に行われた大規模な整地によって耕作地が整備された結果、古代以前の遺構や遺物包含層がほとんど失われたものと考えられる。

中世では、遺物量は少ないものの、遺物包含層が良好に残存しており、開発に伴う整地がほぼ調査区全域で行われたことがわかる。整地によって耕作地がつけられており、建物跡は検出されなかった。ただ、6区で根石の入ったピットが1基検出されたため、建物が存在した可能性がある。耕作地の変遷を面的にとらえることは困難であるが、土層断面の観察により、部分的に数枚の耕作面を確認することができた。鋤溝も多く検出されているが、同じ地区で直交するものもみられることから、耕作地における畝や溝の方向が一定ではなかったことがわかる。

6区北半部で、1面において銭貨や小型銅製品などが点在して検出された。3区や4区でも同様の状況がみられるが、腐食が著しいため銅製品を特定することはできなかった。6区では比較的残存状況が良好であることから、複数の銭貨が重なっている状況や、小型の不明銅製品などが確認された。いずれも単独で検出されており、土器などは伴っていない。分布の状況にも規則性などはみられない。銅製品の錆のひろがりによってピット状に見える部分もあるが、検出状況の観察から、人為的に掘削されたピットに埋納されたものとは考えられない。当時の地面に直接置かれたものといえる。銭貨が完全に重なったものもみられることから、人為的に置かれた可能性が高い。時期ははっきりしないが、いずれも中世

後半に流通した中国銭であることから、中世後半～近世初期のものといえる。耕作地に銭貨を含む銅製品を意図的に置いたり、撒いたりする例は現在のところわからないが、地鎮などの祭祀に伴う習俗によるものの可能性が考えられる。他に祭祀に関係するような遺物は出土していない。同様の例は、泉佐野市内の中嶋遺跡や中間遺跡でも検出されており、地鎮土坑状遺構として説明されている。

近世では、廃棄土坑が検出され、遺物が多く出土した。近世においても、調査地周辺は耕作地がひろがっており、集落域とは離れている。ほぼ全域で鋤溝が多く検出されているが、直交するものがみられることから、時期によって耕作の形態が違っていたことがわかる。また、4・5区では、鋤溝とは異なる形態の掘り残しによる畝状遺構が検出され、作物の違いによる耕作方法の違いと考えることができるが、実態ははっきりしない。廃棄土坑からは、瓦をはじめ陶磁器などがまとまって出土しており、調査における全遺物の大部分を占めている。家屋などの解体に伴う廃材を廃棄したものと考えられる。4区土坑2では、出土した瓦の個体数が1100点を越えており、密集した状態で埋められていた。

図26は、本調査で出土した遺物のうち、瓦類を除いた全土器の個体数をグラフ化したものである。包含層上出のものも含まれる。時期は中世～近世で、細かい時期分類はしていないが、遺物に傾向がみられる。土師器と瓦器が圧倒的に多く、陶磁器類は少ない。土師器は主として中世の皿や羽釜であり、瓦器は中世後期の鉢や甕が多く、碗は少ない。陶磁器類は、近世の染付が大半を占めており、中国製磁器は少ない。中世遺物が多いことを示している。包含層出土遺物の中に中世遺物が多いことから、中世後半～近世初期段階で耕作地の整備のために、大規模な整地が行われたことが推測される。

隣接する空港連絡道の調査で、中世の屋敷地が複数検出されており、本調査地までこれらの区域がひろがるものと考えられていたが、屋敷地に関係するような遺構は検出されなかった。調査地周辺の小字の中には、14世紀初頭の「和泉国日根野村絵図」に記載されている地名と一致するものもみられるが、当時の土地利用状況を示す具体的な遺構などもみつからなかった。絵図においても、集落が営まれていた地域ではないことから、やむをえない結果かもしれない。ただ、隣接して弓雲堂（飯雨堂）という小字が残っており、絵図にも大型の建物が描かれていることから、断定はできないが、この部分で建物跡が検出される可能性は高いものと思われる。また、絵図によると、調査地周辺には日根荘の中心部を通る道が存在しており、重要な地域であったことも推測される。

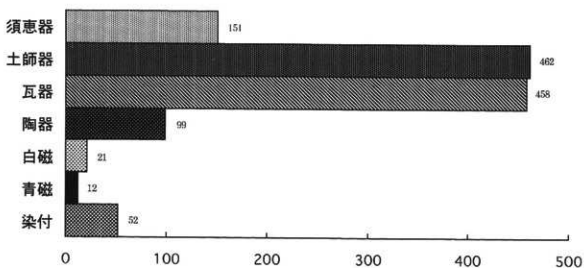


図26 出土遺物個体数グラフ

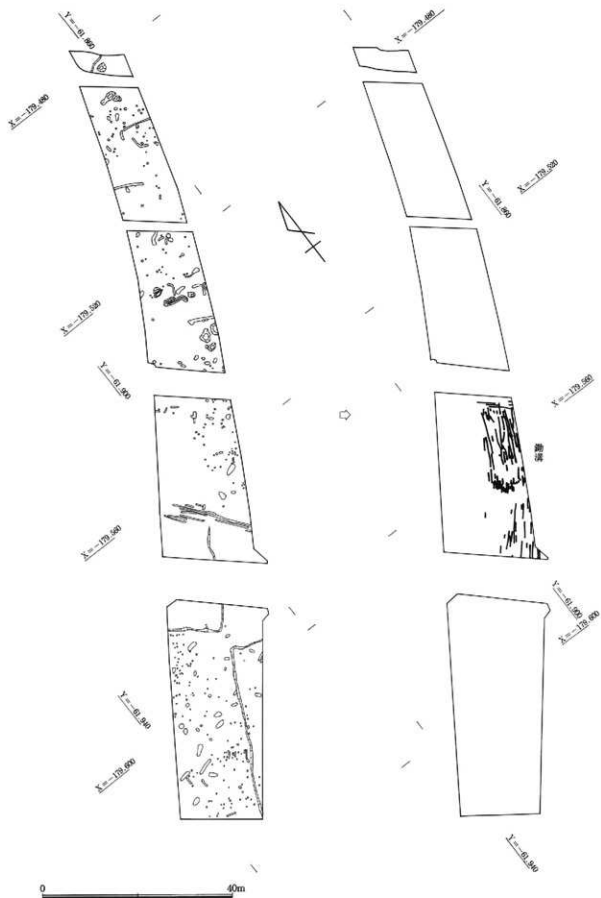


图27 遺構変遷圖 (中世)

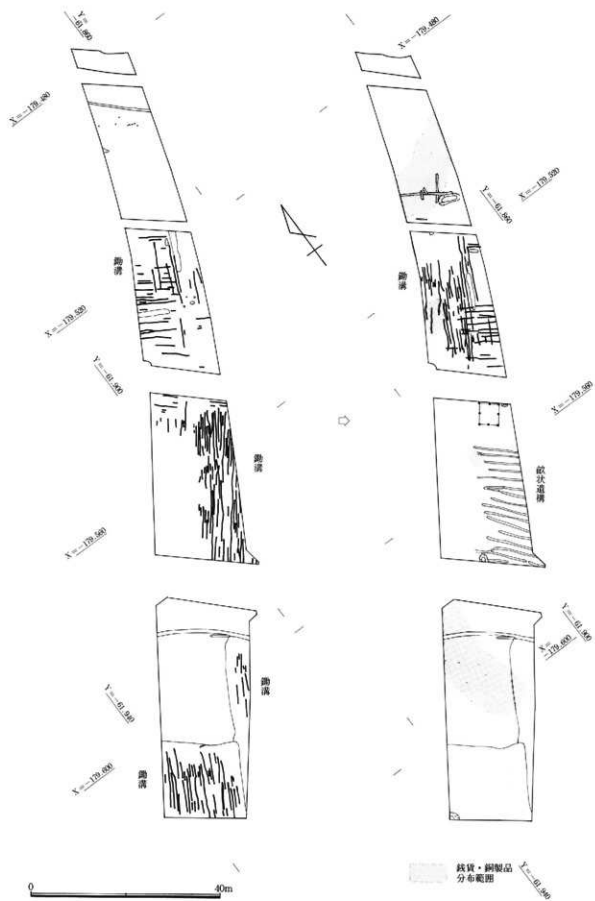


圖28 遺構變遷圖 (近世)

日根野地域は、関西国際空港開港に伴う道路や鉄道の整備によって、急速に開発が進んでいる。特に空港連絡道建設をはじめ、JR日根野駅前開発などにより、調査地周辺の景観も変わりつつある。開発に伴う発掘調査によって、絵図に描かれているもの以外の新事実が判明してきている。今回の調査成果が、日根野地域の歴史の解明に役立つことがあれば幸いである。

参考文献

日根野に関する文献は、数多くあり、全部を網羅することは不可能である。ここでは、引用した概説と発掘調査報告を中心にまとめておく。なお、文献史料を比較的詳しく一覧の形でまとめてあるものに、以下のものがある。

小山清憲『日根野関係文献目録』『シンポジウム日根野総合調査が語るもの—中世花園世界の解明をめざして—レジュメ』（財）大阪府埋蔵文化財協会 1991

〈一般書〉

『角川日本地名大辞典27 大阪府』 角川書店 1983

『大阪府の地名 日本歴史地名系28』 平凡社 1986

『泉佐野市史 復刻版』 泉佐野市 1980

『日根野総合調査報告書』（財）大阪府埋蔵文化財協会 1994

『大阪府全志（復刻版）』 清文堂 1985

『大阪府史 第2巻 古代編II』 大阪府 1990

『大阪府史 第3巻 中世編I』 大阪府 1979

『大阪府史 第4巻 中世編II』 大阪府 1981

『日本史研究 310 特集花園遺構と歴史的景観』 日本史研究会 1988

宮内庁書陵部編『圖書寮叢刊 政基公旅引付』 養徳社 1961

〈発掘調査報告〉

鈴木陽一・田出憲子「日根野城址」『昭和56年度泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要II』 泉佐野市教育委員会 1982

鈴木陽一「日根野城址」『昭和57年度泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要III』 泉佐野市教育委員会 1983

鈴木陽一「日根野城址の調査」『昭和58年度泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要IV』 泉佐野市教育委員会 1984

鈴木陽一「日根野城址の調査」『昭和59年度泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要V』 泉佐野市教育委員会 1985

鈴木陽一「日根野城址の調査」『昭和60年度泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要VI』 泉佐野市教育委員会 1986

鈴木陽一・古谷みゆき「日根野遺跡」『昭和61年度泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要VII』 泉佐野市教育委員会 1987

鈴木陽一・重金誠・松下庄一「日根野遺跡」『昭和62年度泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要VIII』 泉佐野市教育委員会 1988

鈴木陽一・原島康実「日根野遺跡」『昭和63年度泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要IX』 泉佐野市教育委員会 1989

『日根野遺跡 88-6区の調査』 泉佐野市教育委員会 1989

鈴木陽一「日根野遺跡」『平成元年度泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要X』 泉佐野市教育委員会 1990

鈴木陽一「日根野遺跡」『平成2年度泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要』 泉佐野市教育委員会 1991

豊福孝・梅本康広「日根野遺跡」『平成3年度泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要』 泉佐野市教育委員会 1992

豊福孝「日根野遺跡」『平成4年度泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要』 泉佐野市教育委員会 1993

豊福孝「日根野遺跡」『平成5年度泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要』 泉佐野市教育委員会 1994

豊福孝「日根野遺跡」『平成6年度泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要』 泉佐野市教育委員会 1995

『日根野・机場遺跡現地説明会資料』（財）大阪府埋蔵文化財協会 1990

『堺原遺跡発掘調査現地説明会資料』（財）大阪府埋蔵文化財協会 1991

『日根野とその周辺—空港関連事業の調査から—』（財）大阪府埋蔵文化財協会 1991

『中嶋遺跡他 3区・8～13区』（財）大阪府文化財調査研究センター 1995

『日根野遺跡発掘調査概要』 大阪府教育委員会 1996

写 真 图 版

図版1 調査区周辺、3区遺構



1. 調査区周辺



2. 3区第1面、第2面



3. 3区第3面



4. 3区土層断面



5. 3区土坑4断面

図版2 4・5区遺構



1. 4区第1面



2. 4区 建物1



3. 4区土坑2断面



4. 4区土坑2 完掘状況



5. 4・5区 第2-1面



6. 4区 第2-2面

図版3 4・5区、6区遺構



1. 4・5区第3面



2. 4・5区 溝22



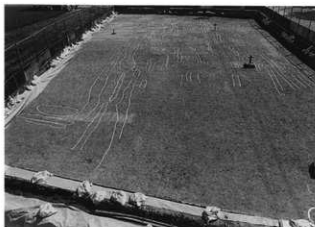
4. 6区北半部第1面



3. 4・5区 溝22 土器出土状況



6. 6区銭貨出土状況



5. 6区南半部第1面

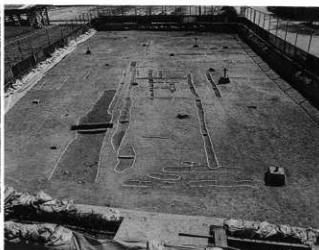


7. 銭貨出土地点の土層状況

図版4 6区、7区遺構



1. 6区北半部第2面



2. 6区南半部第2面



3. 6区南半部第3面



4. 6区第3面



5. 6区ビット22 石検出状況

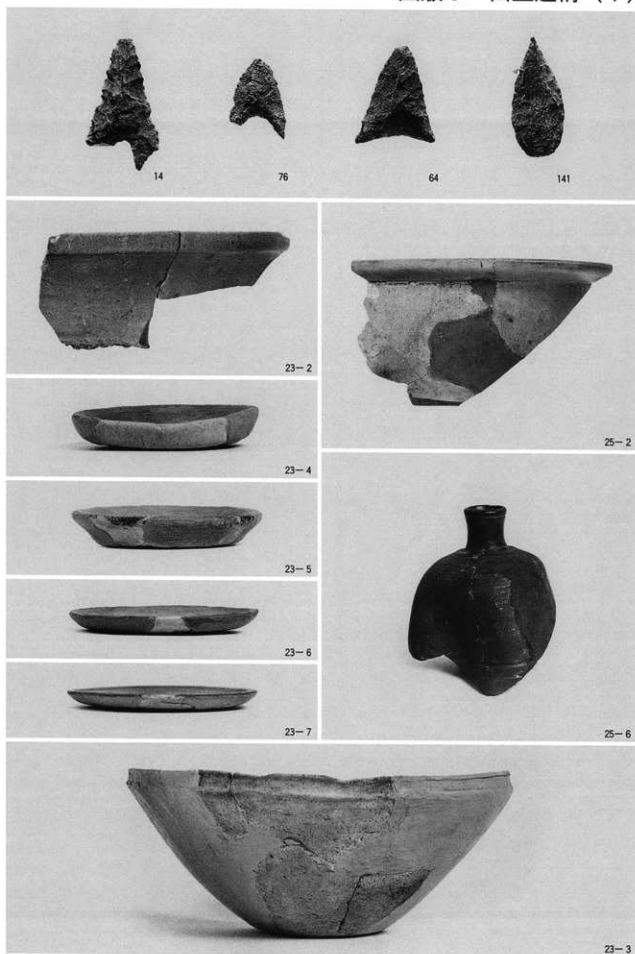


6. 6区段状の高まり断面



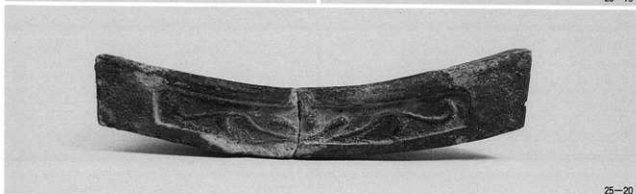
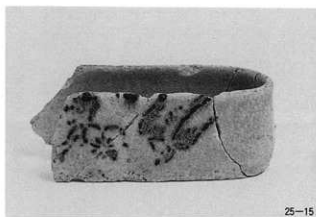
7. 7区

図版5 出土遺構(1)



石器 (14・64・76・141)、中世遺物 (23-2~7)、近世遺物 (25-2・6)

図版6 出土遺構(2)



報告書抄録

ふりがな	ひねのいせき
書名	日根野遺跡
副書名	主要地方道大阪和泉泉南線建設に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人 大阪府文化財調査研究センター調査報告書
シリーズ番号	第16集
編著者名	中村淳磯・橋本亜希子
編集機関	財団法人 大阪府文化財調査研究センター
所在地	〒536 大阪市城東区蒲生2-11-3 小森ビル4階 06-934-6651
発行年月日	1996年9月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	国土地産標 第Ⅵ系	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
日根野遺跡 <small>ひねのいせき</small>	大阪府泉佐野市 日根野	27213	25	北緯 34° 22' 45" 東経 134° 20' 00"	X = -179.470 ~-179.610 Y = -61.350 ~-61.450	1996年5月 から 1996年9月 まで	2,360m ²	主要地方道 大阪和泉 南線建設に 伴う発掘調 査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
日根野遺跡	集落跡	旧石器・縄文 時代 古墳時代 平安時代? 鎌倉時代 室町時代 江戸時代 現代	なし なし 溝 ピット・溝・ 土坑 ピット・溝・ 土坑 溝・土坑 ピット・溝	石鏃 土師器・須恵器 土師器 土師器・瓦器・陶器・ 磁器 土師器・瓦質土器・陶 器・磁器・銭貨 土師器・陶器・磁器・ 瓦 陶器・磁器・瓦	

和大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第16集

泉佐野市日根野所在

日 根 野 遺 跡

—主要地方道大阪和泉泉南線建設に伴う発掘調査報告書—

発行年月日 1996年 9月30日

編集・発行 財団法人 大阪府文化財調査研究センター
〒536 大阪市城東区蒲生2丁目11番3号
小森ビル4階

TEL 06-934-6651 FAX 06-934-7029

印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所

